

12. 退所生活の苦勞

ここでは、現在療養所に再入所されている方の、《退所生活の苦勞》の語りを示したい。ある退所経験者（男性、1964年邑久光明園退所、1991年再入所）は、社会復帰中の生活で感じていた不安について、つぎのように語った。

大阪には、26年以上おったんかな。まず〔外へ〕出て、なにがいちばん不安やったか。全部が不安やったんやけど、ああいう大都会へ出るのはじめてやから。いちばん不安やったのは、やっぱり、散髪屋。行かなあかんやろ、散髪屋はどうしても。それから、銭湯ね。ちょっとあることがあってから、医者へ行くのが、もうほんまに怖かったね。出た時分は若いし、元気やから、医者ということは全然考えんかったんやけど、ちょっとからだ病氣したり、怪我したりしたときは、やっぱり〔医者へ〕行くの、ものすごいためらったです。ちょっとぐらいの怪我やったら、もう行かんかった。

〔昭和〕39年は、長期帰省や。その〔長期外出の4年の〕間に〔光明園に〕2、3べんは帰つとるやろ。正月なんか。もう、独りの正月はかなわんから、思つて。退所扱いにしてもろたのは、それから4年ぐらいしてからやから、〔昭和〕44年か5年やと思ふけど。大丈夫やあいう診断書もろて、行ったでな。薬ももろて行ったで。で、「だいたい1年にいっぺんぐらい〔園に〕来て診察をしたほうがいいやろう」と、医師には言われとったけど、なかなかやっぱり、1年にいっぺんきて診察ちゅうのはできんかったわな。まあ、正月〔に光明園に〕来ても、お医者さんなんかは休みやろ。看護婦さんは、交代交代で出とるけど。〔退所のさいに医者からは〕特別、からだに関して、こういう仕事のほうがええんじゃないか、こういう仕事は危険じゃないかいうことは言われんかったな。

〔退所後は、すでに退所している友人の〕世話になって、仕事探してもろたな、はじめは。そやから、何軒か〔職場が〕変わって、ここに〔戻って〕来るまでおった会社へ〔勤めるようになり〕、そこで落ち着いたわな。ずうっと〔昭和〕42年からおったんやでね。25年ほどおったかな、そこに。

〔ハンセン病療養所に入所していたことは〕ずうっと隠していた。せやから、大阪府の衛生課から〔勤め先に訪ねて〕来たときは、もうびっくりした。退所した友だちに頼まれて保険証を貸したら、その友だちを診た医者から衛生課に連絡があったらしい。もう、あかん、こっちへ帰らなあかんかなと思った。結局、人違いだと言うことで、衛生課の人は帰った。

おれ、4軒〔勤め先が〕変わったでな。いちばん最初のところは、運送屋やで。その時分は、トラック乗る言うたらなんぼでもあったん、仕事。自分で言いよれたんやな。「この会社、嫌や」とか。〔先に退所した人と〕一緒に探してもろて。で、運送屋に入ったんやわな。その時分、トラックの運転手が少なかったわな。トラックに乗って、深夜便いうたら、その時分は花形ちゅうんかな。

そこ〔の会社が〕潰れて〔次の仕事を〕探すときは自分ひとりで探したで、やっぱ

り、苦労したわ、探すときは。〔仕事を探すときに困ったことは〕履歴書を書くとき。嘘書いたこともあるわ。

いちばん最初に入ったところが、1年足らずで潰れたんやわ。社長がちょっと道楽して。して、そのときは自分ひとりで探したから。いろいろ新聞見て、電話したり。そのときは住み込みやったもんで、もう期限付きでそこにおったから何日までに出なあかんちゅうことになっとるから、アパートを探すの、えらかったわな。住み込みからその仕事変わって。住み込み違うでな、そこは。そやから、住み込みするところないから自分で探さなあかんで、周旋屋へ行って、探したな。で、高いとこ借りれんもんな。経済的な余裕ないから、やっぱ、安いとこになるから。そういう面では苦労したちゅうんか。人に言わせたら、そんな苦労でもないやろ言うやろけど。

〔退所後、生活に困ったときに生活保護の申請をしたことは〕ないなあ。そういう手続きちゅうんか、経済的にしんどいときは〔生活保護を申請〕したらええちゅうことを知らんかったわな。そういう制度があるちゅうの知らんかったわな。

そりゃ、井の中の蛙みたいなもんやでえ。小さな村からこっち〔＝邑久光明園〕へ入って、ここも隔離された状態やろお。そやから、実社会のことちゅうんかな、それはやっぱり知識はなかったわな。そういう知識は。せやから、なんていうんか、大阪での27年間いうたら、そりゃ苦労もあったけど、いろいろな体験したな。

〔退所して一般社会で暮らすなかで困ったことは〕やっぱり、病院行くのが、ものすごい怖かった。ばれるんじゃないかちゅう。病院だけに、相手が。医者だけにな。

ちょっとぐらいの熱やったら、〔医者へ〕行かなかったな。怪我でもな。そやから、いちばんはじめ行ったときはな、ここ〔＝脚〕怪我したときや。この、膝の皿のとこへ鉄板を落として、なんぼか針縫って、当て木されてずっとおったでな。そのときはもう病院行かなしょうなかったんやろな。そのときは、まあ、工作中やで、労災保険もろたけどな。社長と一緒に病院まで連れて行ってってくれて。

かなり出血したでな。それ、情けないことに、血い出てるのにわからんかったんやな。痛いのがわからん、やっぱり。配達先の人に、「なんや。えらい血い出とるんやんかい」って言われて、はじめて気がついた。そのときは、もうかなり出血しとった。情けないなあ。あれだけ出血して、わからんかったんや。それ知っとなったようなふりして「ああ、大丈夫、大丈夫」ってやっとなったけど、それ言われたときはびっくりしたもん。真っ赤やったで、この靴のあたり。かなり出血しとった。で、皿やったから余計心配やったわな。皿でも割れとったら〔大変なことだし〕。それでも、得意先から会社までトラック乗って帰ったんやけど、得意先の方は「あの怪我で、ようトラックを運転して帰ったなあ」って言うもったわ。必死やったんやね、やっぱり。

〔自分の病歴や後遺症のことは〕仕事中はそんなに気にしたこと〔ない〕、慣れるにしたがって。せやけど、やっぱり、仕事終わって、飯食って帰って、夜、一人になったら、ときどきそういうことは考えた。こういうことがあったけど、ばれたんかな、っていうのは。自分で気のまわしすぎで、そういうことはあったわな。

おれ、こうして、手え悪いんやけど、周りの人は、このことは全然言わなかった。わかっとなやけど、「おまえ、手え、なんでや？」てなことは一言も言わなかったな、その27年間のあいだで。で、眉毛なんか、おれ、植えとるやろ？ このことも、なんにも言わなかった。散髪屋でも、なんにも言わなかった。散髪屋なんか、はじめはなあ、仕事就いたとこの近くで〔散髪〕しとったやろ。して、仕事変わって〔散髪屋が〕遠（とお）になったやろ。やっぱ、〔ハンセン病がばれるのが〕怖（こわ）あて、いっぺん行ったとこしか行けん。じゃから、電車乗り継いで、遠いところから通って、その散髪屋へ行った。新しいとこへ行く勇気がないんやな。やっぱり、いっぺん行って、わかっとなとこへ行ってまうな、遠（とお）おても。〔療養所外の生活が〕10年、15年になったら、もう、そんなことそう気にせんかったけど、はじめはやっぱりそういう不安いっぱいやった。